

# ファンタジーのポリティクス ボーイズラブを論じるための理論的基盤に向けて

## A Politics of Fantasy Towards a theoretical basis for discussions of Boys Love

大友りお<sup>1</sup>  
日本映画大学 教授

[Abstract]

The assertion of this essay is that expressions of sexual desire through fantasy are a politics of utopia that enables us to visualize a liberated form of the world we live in. Drawing on the work of Judith Butler, I first redefine fantasy from psychoanalytic points of view, through which I argue that identity is a tentative (and even tenuous) property in fantasy, and that the nature of reading practices in Boys Love, a type of pornography and sexual fantasy, demonstrates that it is so. Fantastic narratives and images do not seek to "represent" real people, and readers of fantastic narratives do not find real people in them either. For that reason, the place of the "I" in the act of fantasy reading occupies a critical place in my discussion. My method is to highlight the self-facing nature of BL by comparing with a contrasting case I locate in a canonical text of homosexuality, *Confessions of a Mask*, in which Yukio Mishima aimed to establish the presence of a solid, unique, unified, Japanese male Subject.

[キーワード] ファンタジー、ボーイズラブ、ポルノグラフィ、三島由紀夫、セクシュアリティ、アイデンティティ、フェティシズム、欲望

[Keywords] fantasy, Boys Love, pornography, Mishima, sexuality, identity, fetishism, desire

---

<sup>1</sup> otomo@eiga.ac.jp

## 1. はじめに<sup>2</sup>

1989年、写真家ロバート・メープルソープ (Robert Mapplethorpe, 1946-89) の没後に開かれた彼の作品展が合衆国で大きな波紋を呼んだ。キリスト教右派を中心とした保守グループは、作品中の大胆なヌードとホモセクシュアリティのテーマが見る者を不快にし、社会にとって有害であるとして展示会の中止を求めて法に訴えたのである。同時に、そのような展示会を公費で支援すること自体が問題であると彼らは主張している。一般的には、キリスト教右派は父権的な価値観を支持する立場をとり、フェミニズムとは相容れないことが定則である。ところが今回、彼らはなんとアンドレア・ドーキン (Andrea Dworkin, 1946-2005) やキャサリン・マッキノン (Catherine A. MacKinnon, 1946-) といったフェミニストの論客によって書かれたポルノグラフィ批判を自分たちの主張の論拠としたのであった。すなわち、ポルノグラフィが描く女性は、男性の欲望を鏡像的に写し出した「モノ」であり、父権的な構造の中で不平等に苦しむ現実の女性たちをさらにおとしめるものだという彼女たちの真摯な論点が、「女性」が「ホモセクシュアル」に置き換えられて、政治的スキズムの対岸の敵によっていわば「悪用」されたわけである。

ドーキンらは第二波フェミニズムに属し、「女性」という性的カテゴリーを揺るがないアイデンティティだと見なす立場から社会改革を構想する活動家たちである。同じくフェミニストで活動家のジュディス・バトラー (Judith Butler, 1956-) は、このメープルソープ事件にフェミニズムの潜在的な弱点を見出し、その後クイア・ポリティクスへと移行していく<sup>3</sup>。バトラーが展開するクイア理論では、アイデンティティは単一なものではなく、多層のかつ可塑的であり、同様にセクシュアリティも不可逆的な属性はもたないと見なし、バトラーはそれを反映させた性的マイノリティ解放運動を続けている。

メープルソープ事件は、芸術作品と検閲のもつ基本的な課題に加えて、公費の芸術に対する関わり方や、「観客」の定義についても問題を提示している。これと類似したケースで、2008年、大阪の堺市立図書館がボーイズラブ (以後BL) ジャンルに属する小説を一旦購入停止し、既存の書籍も閲覧不可とした事件がある<sup>4</sup>。この反BLキャンペーンでは、公共の場における性的描写や行動を全般的に批判する保守主義者たちに加えて、それまで彼らに相対する立場にあったゲイ活動家たちが参加し、メープルソープ事件と類似した構

<sup>2</sup> 本稿は、海外の大学で使用する現代日本研究の参考書として企画された各国研究者による論文集 *Boys Love, Manga, and Beyond: History, Culture, and Communities in Japan* (M. McLelland, K. Nagaike, K. Suganuma, and J. Welker eds., Mississippi UP, Feb. 2015) 第6章に掲載された拙著 "Politics of Utopia: Fantasy, Pornography, and Boys Love" に新たに加筆、改稿したものである。貴重な時間を割き丁寧に査読にあたってくださった方がたに感謝を述べたい。

<sup>3</sup> Judith Butler, "The Forces of Fantasy: Feminism, Mapplethorpe, and Discursive Excess," in *Feminism and Pornography*, ed. Drucilla Cornell (Oxford: Oxford University Press, 2007). 以下本稿中の英文和訳に関する文責は全て筆者にある。

<sup>4</sup> 「ボーイズラブ (BL)」は「ヤオイ/やおい」と「少年愛」とともに、男性同士のセクシュアルな関係を直接的、または暗示して描いたマンガや小説を指すが、最近ではゲームやビデオにもこのジャンルの進出がみられる。本来同人誌などで女性が他の女性と共有し消費する目的で作られたものが、現在では男性作家もこの分野に乗り出している。近年の日本の書籍売り上げに大きく貢献しているながら、公開される統計にはジャンルとして含まれていない。用語の定義については、水間翠『隠喩としての少年愛：女性の少年愛嗜好という現象』(創元社、2005)、社会的背景の検証については石田美紀『密やかな教育：やおい・ボーイズラブ前史』(洛北出版、2008) が詳しい。

造が生まれている。このゲイ活動家たちは、BLにおけるホモセクシャルの描写が、現実のゲイとゲイコミュニティを誤ったかたちで表象しており、異性愛規範の中で平等の権利を得ようと努力している彼らの活動を後退させるものだと主張する。

ここで鍵となるのは「表象」という概念である。反メープルソープと反BLの両方において、「作品が何かを間違って表象している」という議論が繰り返しなされていることに注目しよう。何かを間違って表象していると言う時、それは規格化された単一なその「何か」が存在することを前提としている。つまりそこでは、例えばゲイの男、レズビアン、異性愛の男女などのカテゴリーが定まったアイデンティティとして、描く者と見る者とに共有される空間があることが前提で語られているわけだ。しかしながら、その空間はフェミニストの描くユートピアからはほど遠い空間であり、ゲイ活動家が求める理想郷からもかけ離れている。ここにあげた二つのケースにおいて、女性解放と同性愛者解放の両方の議論が、ともに異性愛を基盤とした父権的空間に回収されてしまっている点が当事者には見えていないのだ<sup>5</sup>。

クイア理論的な（そしてポストモダン的な）世界観では、アイデンティティと表象のどちらも有効な概念ではない。しかしながら、アイデンティティの境界線が曖昧であることを認めた時、それに替わる有効なアプローチであるはずのクイア理論やポストモダニズムは容易に使いこなせる議論の道具とは言い難く、いかにして実践的に社会改革につながくという課題を抱えている。

その課題を認識しつつ、この論考では、セクシュアルな欲望の表現について論じるための、より効果的なアプローチを模索しようと思う。セクシュアルな欲望の表現は、テキスト、イメージ、音などによるナラティブの構築を通して行われることが多いが、同じくそれを「読む（消費する）」という行為も表現のひとつであることは看過されがちだ。ここで私は「読む行為」に焦点をあて、それを自己表現、しかもパブリックなパフォーマンスであると定義して論じていくことにする。セクシュアルな幻想の表現といえば、もちろんポルノグラフィが筆頭に上がり、脈々と続くその歴史は男性を主体と仮定した物語の一群であったし、今も多くがそうである。ところが、女性もまた男性と同等にセクシュアルな欲望を持ち、それは男性の欲望を反映したものとは異なっているかもしれない点、そしてすべての女性がセクシュアルな物語の積極的な消費者になりうる点の二つに留意すると、「ポルノグラフィ」という躊躇をもってのみ語られて来た言葉がタブーではなくなる。むしろそれは、多層的な意味を持つ、ファンタジー表現としての可能性を包含する媒体と見なすことができる。ことにBLは、ポルノグラフィのジャンルに長く付着して来たミソジニー（女性嫌悪）と拮抗する点で、その好例である。

以下、本稿は、バトラーの他、リュス・イリガライ（Luce Irigaray, 1930-）およびミシェル・フーコー（Michel Foucault, 1926-84）による学術文献を中心に据えて論じるが、同時に、英国の作家アンジェラ・カーター（Angela Carter, 1942-92）と日本のウーマン・リブ活動家田中美津（1943-）の言葉を擁護としている。私がここで求めているのは、BL

<sup>5</sup> 日本を代表する社会学者でフェミニストの上野千鶴子は、この「堺市図書館BL小説廃棄要求事件を振り返る」と題された講演で、「イマジネーションを規制してはならない、想像力は取り縮まれない」として表現の自由を擁護している（2012年10月14日）点で、規正推進派のフェミニストと一線を画している。

について議論する際の理論的基盤であり、すなわちそれは、1) アイデンティティという概念はファンタジーのシステムのなかでは、暫定的でむしろ不確かな属性を持ち、2) BLを読む行為がそのことを証明している、という二点である。ファンタジーを構築するナラティブは、現実の人々のリアリスティックな模写を意図しておらず、その読者もそこに現実の人々を見出そうとはしていない。それなら、ファンタジーを読む行為の主体である「私」の立ち位置について最初に考察する必要があるはずだ。そのために私はここで、フーコーによる近代的主体批評をもとに、ゲイ文学のカノンの作品である三島由紀夫の『仮面の告白』(1949)の一部を分析し、それとは対照的なBLの特性、「主体の排除」あるいは「自己の消滅」を明らかにしようと思う<sup>6</sup>。最後に1970年代に書かれた初期のイリガライに遡り、セクシュアルな欲望とファンタジーを表現する創作と受容の行為は、より解き放たれた世界(ユートピア)を視覚化するポリティクスであると論じて結論としたい。

## 2. バトラーによるファンタジーの定義

読む「私」について論じる前に、ファンタジーをその広義の解釈から外して、精神分析的に細密な定義を与えると、より広い視界が得られる。ファンタジー(幻想)とリアル(実在)の関係について詳細に論じられたバトラーの論考から始めよう。精神分析学は、ファンタジーを心理的リアリティのひとつだと定義しており、それはリアルの外にあるのではなく、むしろその内部から生まれて来るナラティブであると、バトラーは言う。ファンタジーは人の心的空間にあって、無許可の言語を駆使し、まるでリアルであるかのように振る舞う特性があり、その事自体が、逆にリアルがもつ言語的曖昧さを証明しているのだ、とバトラーは主張する<sup>7</sup>。ファンタジーはリアリティの不安定な特性を暴露するのだが、それを故意に、そして心得顔に、リアルのもつ説得力を「模倣」しつつ行うのだと言う。これを言い換えて説明すると、個人である「私」のファンタジー、それは私事であり、自由で移り気な物語の構築なのだが、そのシステムの中に、その真実性を疑ってかかる機能が既に組み込まれているというわけだ。そしてそれとは対照的に、リアルの領域にあっては、「私」は単一の物語の権能に服従しているため、リアルだと知覚したことはすべてそのまま信じるようプログラムされている。

つまり、ファンタジーは故意でシニカルな特性を持ち、その点で、リアルのナイーブさと比較すると、より複雑な(それゆえ優れた)心的機能だということになるだろう。

バトラーはまた、ファンタジーは歴史的な時間を無視して、宙ぶらりんの時間に留まっているとも指摘する。この属性を裏返しにして、いったんファンタジーに時間性を与えてみると、モラトリウムのようなものとして見なす事が可能になる。モラトリウムは、「まだ到達していない」が、「もうすぐ到達できる」という過渡期を呈し、それは既にリアリティと同じ領域から世界を視野にいれていることになる<sup>8</sup>。ファンタジーが起こりうる未

<sup>6</sup> 三島由紀夫(1925-70)、『仮面の告白』(新潮社、2003)。

<sup>7</sup> Butler, "Forces of Fantasy," p.490. ここで、バトラーが依拠するのは、精神分析学の論文『ファンタジーとセクシュアリティの起源』である。Jean Laplanche and J. B. Pontalis, "Fantasy and the Origin of Sexuality," in *Unconscious Phantasy*, ed. Riccardo Steiner (London: H. Karnac, 2003).

<sup>8</sup> Butler, "Forces of Fantasy," p.488. 「まだ到達していないが、もうすぐ到達できる」リアリティの概念については、Jose Esteban Munozが*Cruising Utopia: The Then and There of Queer Futurity*

来、または実現可能なユートピアである、という考え方に触発されたバトラーは、それを否定してしまうフェミニズムを離れていく。なぜなら、ファンタスマティック（想像力の作用）はジェンダーの政治学のみならず、広くマイノリティの解放活動において重要な媒体を提供するはずだからだ。

バトラーのアプローチのメリットは、これを起点にすると、ポルノグラフィ（性的なファンタジー）の消費が性倒錯者を産出するという言説をきっぱり否定することができる点にある。繰り返して言うと、ファンタジーは真面目に現実を表現しているとみせて、一方で皮肉をこめてそうしている。説得力のある言語（リアル）を模倣しながら、同時にそれを疑ってかかるシステムを内包している。この特性の故に、ファンタジーを消費している「私」は私自身の身体性から距離を持つことになり、自分がこの世界に実存することを意識しなくなる。この距離のために、「私」はファンタジーの消費で得る快感を現実の世界で実現しようとはしない。その二つが連続してはいないからだ。従って、ファンタジーとしてのポルノグラフィが性倒錯者を生み出すことは、その構造上不可能なのである。

### 3. カーターによるポルノグラフィの定義

精神分析学ではなく、作家の視点からこの主張を共有する発言がある。英国のサマセット・モーム賞は若手の小説家に贈られ、英語圏以外の国で二年間過ごすことという特異な条件を課す。1969年にこれを受賞したアンジェラ・カーターは、それまで全く関わりの無かった日本を選び、東京新宿で二年間日本に関するリサーチをする。モーム賞の援助期間を過ぎてなお滞在を希望したカーターは、銀座のクラブでホステスをして生計をたてる。経済成長に浮き立つ当時の日本で、外人ホステスのみを雇用したキャバレーは、企業戦士と呼ばれる男たちの共有する欲望のファンタジーの一環を担い、その途方も無く高額な代金を企業が経費で賄うという特殊な空間を作り出していた。そこでの経験は、カーターに独自のフェミニストの視点を供し、後の作品群の起点となったと彼女自身が述べている。中でも、『サドの女たち：ポルノグラフィのイデオロギー』（*The Sadeian Woman: Pornography and Ideology*, 1974）と題された作品は、マルキ・ド・サドの小説『ジュスティエヌ』と『ジュリエット』を新たな視点で読み直し、書き換えた秀作である。先にあげたアンドレア・ドーキンの小説*Ice and Fire*（氷と火）（1986）も『ジュリエット』の現代版だとみなすこともできるが、ポルノグラフィを完全否定するフェミニストであるドーキンと、ファンタジーを擁護するカーターの立場は大きく異なっている。

カーターは、ポルノグラフィに描かれる性的な関係が、広く人間同士の力関係を具現している点に留意する一方で、ポルノグラフィのナラティブがそれを読む者のセクシャルなファンタジーの中だけで機能していることを指摘している。

---

(New York: New York University Press, 2009) で、可能性は、その実在がまだ目前に現れていないが必須であるという、ある一定の存在の形式であると解説している。BL小説の中心作家であった中島梓（1953-2009）は、男性のオタク文化（狭義）、少女の拒食症や過食症のどれもが、モラトリアムに留まりたいという願いの現れだと分析している。『コミュニケーション不全症候群』（ちくま書房、1995）。ファンタジー創作、青年期、そして大人になることを保留するモラトリアムの延長は、この論考では論じることができないが、BLに関わる重要な課題のひとつだと思う。

ポルノグラフィックな文章は、全ての文学がそうであるように、身体性を言葉に置き換える。この変換によって、文章は欲情のファンタジーに働きかけているのだ。(省略)読者である私たちは、現実の肉体について読んでいるのでは決してないことを知っており、言語によるシミュラクラム(心象)が狡猾なほど明確であるため、人を欲情させる力があるということを充分承知している。テキスト自体に、乾きを癒す力があるわけでは決してない<sup>9</sup>。(括弧内は筆者)

すなわち、ポルノグラフィの中に示される事柄は、全てが「言語によるシミュラクラム」であり、「狡猾なほど明確に」語られたファンタスマティックな物語に過ぎないということが、最初から書き手と読み手の間で交わされる約束である点にカーターは注目する。ポルノグラフィは読む者の欲情をいかに高めるかというミッションを持っているが、そのミッション自体に対して自嘲的である。繰り返しになるが、この自嘲の機能が読み手に距離を持たせる。そのことは、ポルノグラフィが一義的には「アイロニー」のジャンルに属することを示していると私は考えている。そしてアイロニーとは、創造的な媒体であり、かつ自己を正当化するための独白的な世界観から人を解放する機能を持つナラティブの一方方法なのである<sup>10</sup>。

これまでバトラーとカーターの視点を追ってきたのは、それが次に述べるBLについての論考の起点となるからだ。ポルノグラフィはそれ自体が読者の欲望を満たす力を持ち合わせていないとするカーター、エロティックなファンタジーが性倒錯者を生み出すのではないという論拠を示したバトラー、このどちらも正しいという立場から論を進めたい。このことは、BLに関する誤った言説とも大きく関わっている。BLを創る者と消費する者が、現実の生活で性的に満たされない女たちであるという仮定が、「腐女子」という言葉で揶揄されることにつながっている。実際のところ、BLは、性的パートナーのある無しに関わらず、経済階級や性的志向の枠も越えて、広い範囲で創作者と読者を生んでいる<sup>11</sup>。

#### 4. 読者とは何か？

アイロニーとして考えた時、独白的にしかみえないポルノグラフィの空間を、対話的なそれへと転換することができる。そこで読む「私」は距離の交渉をしつつ、自分自身の快感を抽出する。この時、読む行為は、「私」の私的なファンタジーの表現であり、私的な空間におけるパフォーマンスであるはずだ。にもかかわらず、この私的なはずの行為が、個人の欲望をそのまま反映したものだとは言えない点に留意してみよう。読み物を購入す

<sup>9</sup> Carter, "Polemical Preface: Pornography in the Service of Women," in *The Sadeian Woman: An Exercise in Cultural History* (London: Virago Press, 2006), p.15からの引用。カーターはここでもっぱら文学について述べているが、この主張は絵画や映像を含む他の媒体にも適応できる。

<sup>10</sup> Linda Hutcheon, *Irony's Edge: The Theory and Politics of Irony* (London & New York: Routledge, 1994) はアイロニーの分析に優れ、バフチン、ブース、ド・マンによる「読む行為」に関する文学理論を集大成している。

<sup>11</sup> 杉浦由美子『腐女子化する世界：東池袋のオタク女子たち』(中央公論社、2006) p.40、守如子『女はポルノを読む：女の性欲とフェミニズム』(青弓社、2010) p.101、そして前出の石田『密やかな教育』p.340に詳しい。また、水間は、『隠喩としての少年愛』で、少年愛に関して語られる言説を批評的に分析し、この誤った言説がいかに若い女性たちに有害であるかを論じている。

る時、「私」は社会の消費活動に参加しており、そこでした「私」の「自由な」選択も、市場が提供する範囲の中で行われる。つまり「私」が自分の「趣向」だと信じていることが、実は「私」のものではなく、社会が「私」のいないところで構築した「好むべきもの」を「好まされている」のに過ぎないかもしれない、と考えてみよう。「私」の服装も、歩き方も、話し方も、全てが「私」が学ばされた好みであって、「私」の欲望それ自体が、社会から修得した「欲すべきもの」なのかもしれない、と。

こうして「私」が、自分の読む行為を通して社会的に構築された欲望を表現し、具現していると気づく時、それは必ずしも「私」の消滅にはつながらない。なぜなら、そこには批評的で、かつ創造的な参加者になることが、ひとつだけ選択肢として残されているからだ。読者とは、この文脈で考えると、広場にいるパフォーマンス・アーティスト同様に、公開されたエージェントなのである。次の項で、BL読者の特性を明確にするため、読む行為の異なるモード（流儀）について論じる。

## 5. 三島のオートエロティシズムと読む行為

文学を歴史的に見ると、「告白」というジャンルが近代性を強く反映しつつ発展したことが分かる。中でも三島由紀夫の『仮面の告白』は、その代表作品のひとつとして広く世界中で読まれている<sup>12</sup>。告白文学はしばしば、水面下にあったセクシュアルな欲望が浮上する構造を持っているが、三島の場合は、それと同時にcoming-of-age story（成長小説、Bildungsroman）であり、しかもcoming-out storyとなっている。主人公は父の書齋で盗み見た絵画集の中に、木に縛りつけられ無数の矢に射抜かれた若い殉教者聖セバスチャンを見つけ、そこにエロティシズムを発見する。彼にとって、男性の身体に欲情するということは、自分自身の身体にもエロスを見出すことであり、他者に向かう必要のないオートエロティシズム、すなわち自己完結的な欲望の構造に絡めとられることになる。興味深いことに、告白のナラティブの構造的特性も、基本的には他者に出会うことがなく、軌道を廻り続ける惑星のようである点で、この作品は、テーマと様式が一致している。

『仮面の告白』の若いナレーターは、さらに進んで、自分だけの聖セバスチャン物語を創作する。それは、書く行為を通して、初めてそれを発見した時の、いわば原初の快楽を再現したいというだけでなく、それを繰り返し読む行為を通して、快楽を所有することを意図している。これと同様の欲望が、BLの創作と消費の欲動となっているのだが、後者は物語の快楽を個別に所有する代わりに、他と共有することでそれを増幅させてきたことは、留意すべき相違点である。

告白という表現様式では、告白する者は永遠に語り続けようとし、それによって失った力を取り戻そうとし、また求められている転身を拒み続ける。「他者に出会う」という精神的な出来事がなければ、自分が変わることはないのであり、告白の構造の中にはその機会は見出せない。言い換えれば、近代文学における告白は、「他者との出会い」に対する心理的な拒否反応の示威行動のようなものである<sup>13</sup>。それは、一般的に閉じたサーキット

<sup>12</sup> 英語圏の大学の講座で取り上げられる「告白文学」のカノンは、他にアウグスチヌス『告白』、ジャン・ジャック・ルソー『告白』、トーマス・ド・クインシー『阿片常用者の告白』、そしてフォード・ドストエフスキー『地下生活者の手記』など。

<sup>13</sup> ドストエフスキーの『地下生活者の手記』とこの作品の両方で、ひとりの女性が現れて心をつくす

の構造を持ち、自己観察と自己監視に熱中する告白者は、そのサーキットの外側にいる他者の存在を認識することができない。三島の主人公が会うのは彼自身であって、その欲望の標的も同一性の中にある。それはまるで、自分について語り続けている自分に恋をしているかのようだ。BLの物語構造もまた、これと良く似て、他者には決して会うことがなく、主人公たちは同一性の中で欲望を交換する。しかし、BLに見るオートエロティシズムは、三島の場合とは本質的に異なる点を次に指摘しよう。

『仮面の告白』の前半は、子供時代の記憶が十件ほど続けて語られ、それが主人公のホモセクシュアリティの証拠物件として提示されている。驚くべきは、それら全てにおいて、主人公は自分の欲望の方向を自分自身に向けていることである。聖セバスチャンになりたい、と同時に、彼の若く美しい身体を射抜く矢になりたい、というように。小説全体を通して、主人公は自分の記憶のひとつひとつにホモセクシュアルな欲望を読みとっていき、同時に、欲望する主体である「私」すなわち「真実の自己」を発見する「私」を言語的に構築する。もちろん、「真実」の発見は、それが禁じられていなければいほど魅惑的であり、三島はこの作品でその法則を最大限に利用している<sup>14</sup>。一方で、例えば、BLに先行する森茉莉（1903-87）の美少年小説を読むと、そこには罪の意識もタブー感覚も存在しない世界がある。そしてその分だけ、物語の回路が単調であると私には思える。問題はしかし、罪悪感や禁忌ではなく、「真実の自己」という近代的主体の概念の有無にあるのだ。森の作品を含めて、BLのファンタスティックな物語は、作家も読者も近代性というパラダイムから解き放たれたところにある。

『仮面の告白』は、フーコーが指摘した「自己を知る」ことに夢中になった「近代の主体」<sup>15</sup>を小説の中で具現した作品であり、それは近代文学作家三島による、日本人男性の主体の存在を世界に知らしめる意図を持った敗戦プロジェクトであったようにも見える。ホモセクシュアルであるとカムアウトすることは、その人の持つべき社会的権威を下げることである。だからこそ、ここでは「真実の自己を知る」ことの重みが一層増すのだ。主人公は自分がホモセクシュアルだと悟るが、その際、自分の他の性志向は無視している。小説の中では、サドマゾヒズム、人食い、自慰なども主人公の性的なファンタジーとして詳細に語られているにもかかわらず、である。まさに、近代の言説が多くの性志向のうちホモセクシュアリティのみ、人のアイデンティティとして特権化したのだ、というフーコーの理論を例証している。

敗戦を描きつつ、西洋人に劣らない心理の深みを持ち、それを言語化する力を持つ日本の「私」を、近代小説という芸術の中で構築するこのプロジェクトが、ホモセクシュアリ

---

が、そのどちらにおいても、女性は相容れない他者として主人公に突き放され、真の意味での「出会い」は実現しない。異文化の壁を越える共通点がそこに見える。

<sup>14</sup> 主人公は父の留守に書齋に忍び込み、聖セバスチャンの絵画に出会うが、三島の後期作品『暁の寺』（『豊穡の海』第三巻、1970）では、中年の主人公が、その父から譲り受けたドイツ語の法学書で埋められた本棚に除き穴を工作する。彼が隣室に見た欲望の対象、タイ皇室の姫は、そこでもうひとりの女性と愛し合っている。彼は、そこに彼女の他者性を認める代わりに、彼女の裸体に、20歳で死んだ美しい若者（彼の最初の欲望の対象）と同じ三つの黒子を見つける。自分が欲するものだけを見、他者を排除する構造がここまで続いている。もちろん三島はそれを悲劇として自己批判的に書いている点で、確信犯である。

<sup>15</sup> Foucault, *History of Sexuality, Vol. 3, The Care of the Self* (Harmondsworth: Penguin, 1986).



ティというテーマに依ったことは、作家の独自性に起因するのではなく、むしろ近代性の大きな波が世界中を席卷した時代のためだとみる視点もあって良いと私は思う。

## 6. BLのオートエロティシズムと読む行為

映像文化論を専門とする石田美紀は、著作「密やかな教育：やおい、ボーイズラブ前史」(2008)の中で、BLジャンルの草分けである、いわゆる「花の24年組」と呼ばれる女性マンガ家たちと三島とを並べて論じている。1960年代にギリシャやイタリアを含むヨーロッパ旅行をした三島は、そこで(男性の)身体を持つ存在感にめざめ、言葉が代替する身体(文学)ではないものに強く魅せられる。その後30歳で自身の身体改造に取り組み、それは、彼の生き方とそして死に方をも規定していくことになる。

石田によると、24年組の女性たちも1970年代に一月のヨーロッパ旅行をする。竹宮恵子、萩尾望都、そして増山のりえらが発見し、持ち帰ったものは、ヨーロッパの都市の風景、建物、ファッション、匂い、色、そして歴史的事実といったとてつもない量の情報であった。それは、帰国後彼女たちが描いた少年たちの愛のファンタジーに真実性を与え、厚みを供給した。これが、少女マンガの新たな流れを生み、BLの文化的背景をつくる<sup>16</sup>。実際、萩尾による『トーマの心臓』(1974)や竹宮による『風と木の詩』(1976-84)は後に少女マンガの領域を越えて読まれ、研究されることとなる。三島が作家として最も健筆をふるった1960年代は、身体が文化的なスペクタクル(見せ物)となり、政治性をもった時代である。東京オリンピック、アングラ劇場、暗黒舞踏、新左翼学生運動、そして公共の空間を練り歩く多くの反政府デモにおける身体、それは、三島の切腹(1970)、さらには浅間山荘事件(1972)へと収束され、拡散していく。

石田は、その後に来る24年組は、彼女たちなりの革命の構想を持っていたと指摘する。それは、人間の身体を風景の一部に同化するという芸術革命である。先に、彼女たちはヨーロッパから多くの情報を持ち帰り、それが作品に厚みを与えたと述べたが、それは背景に本らしさを提供したに過ぎず、ここでいうことと相反しない。彼女たちの作品では、身体は感情を運ぶ器ではあるが、明確に無機質なのである。美しい少年たちのファンタスマティックな姿を通して、彼女たちは、異性愛の規範的なロマンスでは表現しきれない自分たちの憧憬や欲望を表現する。三島のフェティシズムが3Dのギリシャの彫像であったのと対照的に、女性アーティストたちは2Dの欲望の記号を生み出すことで革命を図った<sup>17</sup>。スーパーフラットと村上隆が名付けた芸術感覚は、ここにも始まっていた。美しい少年はBLのフェティッシュなオブジェだと思われがちであるが、彼女たちのプロジェクトは身体の実在感を拒否することに起因しているため、美しい身体を所有したいという欲望も、共に拒絶しているのである。

BLのテキストを読む時、まず読者はそこにある人物の身体の違いを認識する。それは、物語を構成する人間関係のネットワークの中であって、異なるポジションを示す記号であ

<sup>16</sup> 『密やかな教育』 p.109-54を参照。石田はこの中で、ルキーノ・ヴィスコンティの映画作品に対して両者が全く異なる側面に注目している点を指摘して興味深い。『地獄に堕ちた勇者ども』(1969)、『ベニスに死す』(1971)、『ルートヴィヒ』(1972)等、どれもヨーロッパの歴史背景が顕著で、コスチュームと美術が突出した映画である。

<sup>17</sup> 石田『密やかな教育』 p.112, p.150を参照。

る<sup>18</sup>。身体の差異の認識がさまざまな方向に向かって欲望を生産し、読者は自分の単一な身体を重ねて異なる役柄を演じていく。BLの読者はこの点でオートエロティックであると同時に、それは「ごっこ」ゲームなのだ。藤本由香里は、著作『私の居場所はどこにあるの？：少女マンガが映す心のかたち』の中で、これがジェンダーの遊戯であることに注目する<sup>19</sup>。つまり、複数の役割を演じる過程で、読者は自分が持つ「女性の身体」の存在を忘れることができるのだ。この点が、三島の主人公と大きく異なっている。

ファンタジーの中では、読む「私」は、物語に遍在している。「私」はBLの主人公のうつむきがちな眼差しとなり、同時に彼がくつろいでいるソファのベルベットの感触となる。突然開く窓にも、風が揺らす彼の襟足の巻き毛にもなる。そしてドアを開けて登場した彼の恋人は、もちろん「私」であり、その恋人を燃えるように見つめる彼も、もちろん「私」だ。読む行為がこのように展開する時、「私」は複数になってひとつひとつのシーンのディテールを操作し、単一の人物に同一化することがない。統一された主体の中心であるはずの「私」が、この行為の過程で消滅していく。BLを読む「私」は、強健な主体を構築しようとはがく三島の主人公とは異なり、喜んで風景の中に紛れこみ、主体を見失うことに快感を見出している。

そこでは、ファンタジーと「私」の間にあったはずの距離が曖昧になり、「私」は自分で物語を作り、演じ、シーンの全体を捉える。その作業が手際良くできる理由は、「私」の目的が、このファンタジーを通して最大の快感を得ることに集中しているからだ。この過程で、「私」が消滅することは、三島の主人公が獲得できない種類の至福である。実際に身体を抹消することで、至福を得るという手段は、近代性の地図から脱出できなかった三島に残された方法だったと仮定すると、それに反して、全てのファンタジーの最終ゴールは、「私」の消滅なのである。ファンタスマティックな空間では、自分が誰で何をやる人かも、どこから来てどこへ行こうとしているかも覚えていない。その至福の時には、他人にどう見えようともかまわない幼児のイノセンスを取り戻している。そしてここで注目すべきは、藤本が指摘した、「私」の身体に性別がつけられていることを忘れるという点だ<sup>20</sup>。その場に「読者」は生まれず、他者に出会うことなく得られるオートエロティックな快感が、不思議な事に「私」の身体と共に「私」自身を排除するという特異な事態が起こっている。

## 7. ユートピアの政治学：フェミニズムとクイアリズム

BLを読む行為の中で読者が消滅するという主張はネガティブに聞こえるかもしれない。しかし、自分の性的に定義された身体を忘れ、固定されたアイデンティティを離れて風船のように浮かぶ感覚は、人を解放に向けるベクトルである。そして解放は、クイア理論のコアにある概念だ。このことは、フェミニズム内部で繰り返される議論の争点に再び

<sup>18</sup> BLを読む者が複数の人物に同一化するという点はKazumi Nagaike, *Fantasies of Cross-Dressing: Japanese Women Write Male-Male Erotica* (Leiden: Brill, 2012) でも主張されている。

<sup>19</sup> 『私の居場所はどこにあるの？』(朝日新聞出版、2008)

<sup>20</sup> BLを読む者が性別をつけられた自分の身体から逃避するという主張に関する議論は、Keith Vincent, "A Japanese Electra and Her Queer Progeny," in *Mechademia 2* (2007) で詳細にわたり検証されている。

私たちを連れ戻してしまう。アイデンティティの政治性は平等と自由を推進するのに最も有効な方法だ、という立場からクイア理論を否定するフェミニストの活動家たちがいる。彼女たちは、「ジェンダー・フリー」社会という概念は、良さそうに見えて、しかし大きな危険性をはらんでいると考える。現実の世界では、男性と女性、異性愛者と同性愛者との間に存在する力の非均衡を是正するための活動の歴史があり、社会が与えたアイデンティティが、自分の持ちたいそれとは異なるゆえの苦しみをもつ人々も未だ存在している。アイデンティティは無効だという立場が、そのような解放活動を必要の無いものにしてしまう危険があるという議論だ。これに対するクイア理論は、ジェンダー・フリーという言葉の方が不適切であることに同意し、なおかつ、現存するジェンダー間の不平等な力関係を解体することを使命と考える。そして、真摯にファンタジーを擁護することは、まさにその政策かつ実践だという立場をとる。なぜなら、ファンタジーは人々の心象風景の中にユートピアの構想を産み、それはゆるやかだが、確実に現実社会の改革へと向かう道を示すからである。

1977年、リュス・イリガライが提示したフレンチ・フェミニスト的ユートピアは、ショッキングな表現と新しい視点で英語圏を震撼させた。女性の身体は、phallogocentric (男根中心主義的) な欲望が描くイメージとは異なり、女性器の外陰部はまるで上下の唇のように、いつでもどこでも自由に触れ合い、*jouissance* (過度で、終わりの無い快感) を得ることができる<sup>21</sup>。すなわち男根の仲介を必要としない、オートエロティシズムの身体である、と主張したのである。ここで注目すべきは、エロジナス・ゾーン (性感帯) が性器部分に限定されるのではなく、女性の身体全体に広がっている、とイリガライが指摘した点である。女性のセクシュアリティの神話、すなわち女性は「埋められることを待ち望んでいる空洞」であるというphallogocentricな言説を覆す、力強く破壊的なメッセージを、西洋哲学を脱構築する新たな言説の中心として捉えている。当時、そして現在でもなお、しばしば遭遇する「空洞」の神話は、ミソジニーが主流のポルノグラフィが拠り所にしてきた物語でもある。

女性の身体をphallogocentrism (男根的ロゴス中心主義) 批判に持ちこんだのは、フランスのフェミニスト思想家たちであったが、同じ頃の日本の女性たちを見てみると、驚くほど共通点がある。1970年、先にあげた「花の24年組」が大泉サロンと名付けた東京のアパートで、自分たちのアイデアを語り合い、試し合っていた頃、ウーマン・リブと呼ばれた女性解放活動家のひとりである田中美津は、『便所からの解放』というパンフレットを書いていた。この社会は女性を、男の幸福を作る場所 (母) と男が排泄する場所 (便所) のどちらかに振り分けており、そのどちらの役割も、女性に一個の社会的人間としての尊厳を認めてはいない<sup>22</sup>。田中はまた、女性に関するその言説は、性行為を「清潔ではないもの」とする社会の意識を顕著に表していると指摘している。イリガライと同様に、田中が心に描いたユートピアは、女性が、父権制が投射した「女性性」のイメージを引き受けるのではなく、自分でありたいように生きることができる社会だった。田中はそれを「今

<sup>21</sup> Luce Irigaray, *This Sex Which is Not One* (New York: Cornell University Press, 1985).

<sup>22</sup> 田中美津『いのちの女たちへ：とり乱しウーマン・リブ論』(河出書房、1992) p.18参照。守の『女はポルノを読む』p.12にも言及がある。また、James Welkerは*Boys Love, Manga, and Beyond* (2015) の中で、1970年を少年愛ジャンルの始まりの年と見なしている。

ここにいる、このままの私」という言葉で表現し、新しい人間関係の中で女性は、父権的な想像に規定された女性のセクシュアリティの外部にあって、かつ自身のセクシャルな欲望を所有する、一個のトータルなパッケージとして認識される存在となることを構想した。

それから40年以上を経て、多くの女性たちがBLの物語を創り、そして読んでいる。それは、異性愛の男性の快樂のために仕立てられたものとは異なるタイプのポルノグラフィで、エロティシズムは性器領域に限定されてはおらず、女性たちはそこで、父権制が産んだ亡霊である「女」に煩わされることなく、自身のセクシャルな欲望を表現しようとしている。この側面が、BLの最も有意義な政治的貢献であろう。1990年代の中頃、中島梓はこれを「ジュネの世界」と呼んだが、それは同時にフェミニスト宣言のように聞こえて興味深い。

JUNEに心を寄せる少女たちの描いたり、あるいは愛したりする世界のなかには、少女たちの居場所はあらかじめ失われており、そのなかで行われる恋愛には「異なる性」である相手の性は存在しない。自分の存在しない宇宙のなかで、彼女たちは影となり、もはや自分自身が「リング」 - ないし人買いのさらし台にのせられるおそれはまったくなしに、人と人をつなぎ、あるいは人に人を欲させる愛という見知らぬ素材を存分に解剖したりいじりまわしたりすることができる<sup>23</sup>。

雑誌『ジュネ』(1978-79、1981-96)は、発行当時少年愛に焦点をおいた雑誌として、女性愛好者に活動の拠点を提供していた。三島のフェティシズムのベクトルが常に自身の身体へと向かうのに比して、人と人を繋ぐ、インターパーソナルな関係を紡ぐことが彼女たちの原動力であり、中島はそのネットワークの要になっていた。先に私は、BLは無機質で、現実の身体が排除されていると述べたが、それはBLが人のいない空間だという意味ではない。先にあげたように、BLを読むモードは、人の関係性を制御していく活潑な脳の運動を必要とするもので、人と人との力関係、ことに、その関係性が可塑的である点を読む者を魅了している。関係性の可塑性を楽しみ、実験することに喜びを感じる人は、もちろん女性に限定されるわけではない。女性による女性のためのBLは、実は多くの男性ファンを持っており、彼らも同様に、現実の人間関係を変えたいと希求している人々なのだ。

## 8. おわりに

BLと三島の相違点を再度確認しよう。欲望の対象は、それ自体は意味を持たず、ただ限りなく置換されるメトニミー（換喩）であるとラカンは指摘した<sup>24</sup>。このメカニズムを三島は直感的に理解しており、置換されないオブジェとなることに固執している。自分のスキヤングラスな身体を、意図的に世界観客のスペクタクルとし、それによってMishima

<sup>23</sup> 中島梓『コミュニケーション不全症候群』pp.232-233。

<sup>24</sup> メトニミー、欲望、フェティシズムなどに関するラカンの定義については、Dylan Evans, *An Introductory Dictionary of Lacanian Psychoanalysis* (London: Routledge, 2001) に明解な解説がある。

という固有名詞とそれに付随する物語のテキストを、歴史の中に定着させ、永遠に欲望の対象となることを求めているからだ<sup>25</sup>。BLの書き手や読み手は、そのような固有性に対するオブセッションを持ち合わせておらず、彼女たちの欲望の対象は、テキストの中の美しい少年の身体ではなく、彼が他の人物との間に作る関係性それ自体であるところに特異性がある。例えば、社会的に非力な若者が、よりパワフルな男性によって、自分がある種の快楽を具現する力を持っていることを学ばされ、それによって力関係を逆転させるクリシエ的なプロットにおいても、彼女たちは、主人公の変身をなぞることで、関係性の遊戯を楽しむ。

人間関係のネットワークはフェミニストだけでなく全てのユートピアの青写真にとって重要な要素である。なぜなら、人間はソーシャルな動物であり、その幸福は仲間との関係性の中でしか達成されないからだ。BL愛好者たちは、現実に性的関係に欠如した人々であるというわけではない。だが確かに、実現されない欲望がそこにはある。それは基本的な人間の欲望であり、社会の中で一個のトータルなパッケージとして認識されること、すなわち田中美津のいう「今、ここにいるこのままの私」として他の人と接することへの欲望である。

この論考で私は、強固で、揺るぎない男性的な主体の構築を担った『仮面の告白』の主人公と比して、主体としての自分が消滅する瞬間を希求するBLの読み手について論じた。BLを含むポルノグラフィの、物語を読む行為を通して表現された「自己」は、アイデンティティという概念から遠く離れたところにあり、それゆえ家族や同僚に「真実の自分」を分かってもらうために、「私はBLの愛好者だ」とカミングアウトする切羽詰まった必要性もない。「腐女子」であることは、アイデンティティのカテゴリーに属することではなく、単にその人の趣向を示すだけで、しかもそれは多くの人と共有する、決してユニークではないひとつの好みにすぎない。「クイア」という言葉を、侮蔑用語から、知的でアイロニーを持つ呼称に変化させたように、「腐女子」も自虐的なネーミングから脱することは可能だろう。「クイア」はLGBTといったアイデンティティのカテゴリーのひとつではなく、多様性の謳歌であり、生き方である。そしてその楽天的な性格を批判されながらも、常にユートピア的なビジョンであり続ける。

とはいえ、その「腐女子」たちが愛好する、美しい男性登場人物たちの関係性の物語は、おしなべて型どおりで、既存のポルノグラフィの物語の域を出ているとは必ずしも言えない。慣れ親しんだ異性間の関係性がクリシエであるからこそ、効果的な欲情生成のラブマシンになりうるのであれば、新しい、型破りの、解放された関係性を描いてなお同等の効果を得ることは可能だろうか。そこにBLのこれからの課題があると指摘して、筆を置くことにする。

<sup>25</sup> 三島は1970年11月25日に自衛隊市ヶ谷駐屯地でクーデターを起こし、割腹自殺を遂げるが、事前にタイムズ紙記者であるHenry Scott-Stokesに事件の取材を依頼している。Scott-Stokes, *The Life and Death of Yukio Mishima* (New York: Ballantine Books, 1985). この本の後記 (Postscript) は司法解剖を意味する (Postmortem) と題され、三島がホモセクシュアルであったことの「証明」をその身体に見ようとする週刊誌的な興味が国内外にあったことを示して興味深い。